一

山路(ヤマミチ)を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に棹(サオ)させば流される。意地を通せば窮屈(キュウクツ)だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画(エ)が出来る。

人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣りにちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容(クツロゲ)て、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑(ノドカ)にし、人の心を豊かにするが故に尊(タッ)とい。

住みにくき世から、住みにくき煩(ワズラ)いを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である、画(エ)である。あるは音楽と彫刻である。こまかに云えば写さないでもよい。ただまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さぬとも瑽鏘(キュウソウ)の音(オン)は胸裏(キョウリ)に起る。丹青(タンセイ)は画架(ガカ)に向って塗抹(トマツ)せんでも五彩の絢爛(ケンラン)は自(オノズ)から心眼に映る。

※瑽鏘(キュウソウ)の音＝玉(ギョク)や金属が触れ合って美しく鳴り響く音　※丹青＝赤い色と青い色、絵の具

ただおのが住む世を、かく観じ得て、霊台方寸のカメラに澆季溷濁(ギョウキコンダク)の俗界を清くうららかに収め得れば足る。

※霊台方寸＝魂のある胸の裡、心のこと　※澆季溷濁＝人情や風俗が軽薄で、世の中が乱れていること

この故に無声の詩人には一句なく、無色の画家には尺縑(セッケン)なきも、かく人世を観じ得るの点において、かく煩悩を解脱するの点において、かく清浄界(ショウジョウカイ)に出入(シュツニュウ)し得るの点において、またこの不同不二(フドウフジ)の乾坤(ケンコン)を建立(コンリュウ)し得るの点において、我利私慾の羈絆(キハン)を掃蕩(ソウトウ)するの点において、――千金の子よりも、万乗の君よりも、あらゆる俗界の寵児よりも幸福である。　※尺縑(セッケン)＝絹織物、画布　※清浄界＝清浄な世界、浄土　※不同不二の乾坤＝唯一無二の世界

※羈絆(キハン)を掃蕩(ソウトウ)する＝しがらみを完全に取り去る

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知った。二十五年にして明暗は表裏のごとく、日のあたる所にはきっと影がさすと悟った。三十の今日はこう思うている。――喜びの深きとき憂いよいよ深く、楽(タノシ)みの大いなるほど苦しみも大きい。これを切り放そうとすると身が持てぬ。片づけようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖(フ)えれば寝る間も心配だろう。恋はうれしい、嬉しい恋が積もれば、恋をせぬ昔がかえって恋しかろ。閣僚の肩は数百万人の足を支えている。背中には重い天下がおぶさっている。うまい物も食わねば惜しい。少し食えば飽き足らぬ。存分食えばあとが不愉快だ。……

余(ヨ)の考(カンガエ)がここまで漂流して来た時に、余の右足(ウソク)は突然坐りのわるい角石(カクイシ)の端を踏み損(ソ)くなった。平衡を保つために、すわやと前に飛び出した左足が、仕損じの埋め合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺ほどな岩の上に卸りた。肩にかけた絵の具箱が腋(ワキ)

の下から躍り出しただけで、幸いと何の事もなかった。

立ち上がる時に向うを見ると、路(ミチ)から左の方にバケツを伏せたような峰が聳(ソビ)えている。杉か檜(ヒノキ)か分からないが根元から頂きまでことごとく蒼(アオ)黒い中に、山桜が薄赤くだんだらに棚引いて、続ぎ目が確(シカ)と見えぬくらい靄(モヤ)が濃い。少し手前に禿山(ハゲヤマ)が一つ、群をぬきんでて眉に逼(セマ)る。禿げた側面は巨人の斧で削り去ったか、鋭どき平面をやけに谷の底に埋めている。天辺に一本見えるのは赤松だろう。枝の間の空さえ判然している。行く手は二丁ほどで切れているが、高い所から赤い毛布(ケット)が動いて来るのを見ると、登ればあすこへ出るのだろう。路はすこぶる難義だ。

土をならすだけならさほど手間も入(イ)るまいが、土の中には大きな石がある。土は平らにしても石は平らにならぬ。石は切り砕いても、岩は始末がつかぬ。掘崩(ホリクズ)した土の上に悠然と峙(ソバダ)って、吾らのために道を譲る景色はない。向うで聞かぬ上は乗り越すか、廻らなければならん。巌のない所でさえ歩るきよくはない。左右が高くって、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿って、その頂点が真中を貫いていると評してもよい。路を行くと云わんより川底を渉ると云う方が適当だ。固より急ぐ旅でないから、ぶらぶらと七曲りへかかる。

たちまち足の下で雲雀(ヒバリ)の声がし出した。谷を見下(ミオロ)したが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。ただ声だけが明らかに聞える。せっせと忙しく、絶間なく鳴いている。方幾里(ホウイクリ)の空気が一面に蚤に刺されていたたまれないような気がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の余裕もない。のどかな春の日を鳴き尽くし、鳴きあかし、また鳴き暮らさなければ気が済まんと見える。その上どこまでも登って行く、いつまでも登って行く。雲雀はきっ

と雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入って、漂うているうちに形は消えてなくなって、ただ声だけが空の裡(ウチ)に残るのかも知れない。

巌角(イワカド)を鋭どく廻(メグ)って、按摩(アンマ)なら真逆様(マッサカサマ)に落つるところを、際どく右へ切れて、横に見下(ミオロ)すと、菜の花が一面に見える。雲雀(ヒバリ)はあすこへ落ちるのかと思った。いいや、あの黄金の原から飛び上がってくるのかと思った。次には落ちる雲雀と、上る雲雀が十文字にすれ違うのかと思った。最後に、落ちる時も、上る時も、また十文字に擦れ違うときにも元気よく鳴きつづけるだろうと思った。

春は眠くなる。猫は鼠を捕(ト)る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さえ忘れて正体なくなる。ただ菜の花を遠く望んだときに眼が醒める。雲雀の声を聞いたときに魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全体が鳴くのだ。魂の活動が声にあらわれたもののうちで、あれほど元気のあるものはない。ああ愉快だ。こう思って、こう愉快になるのが詩である。

たちまちシェレーの雲雀(ヒバリ)の詩を思い出して、口のうちで覚えたところだけ暗誦(アンショウ)して見たが、覚えているところは二三句しかなかった。

※シェレー＝パーシー・ビッシュ・シェリー＝1792 年生イギリス人ロマン派詩人：1820 年詩「ひばりに寄せて」発表

その二三句のなかにこんなのがある。

We look before and after

And pine for what is not:

Our sincerest laughter

With some pain is fraught;

Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.

「前をみては、後(シリ)えを見ては、物欲(モノホ)しと、あこがるるかなわれ。腹からの、笑といえど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想(オモイ)、籠(コモ)るとぞ知れ」

なるほどいくら詩人が幸福でも、あの雲雀のように思い切って、一心不乱に、前後を忘却して、わが喜びを歌う訳には行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく万斛(バンコク)の愁(ウレイ)などと云う字がある。　※万斛＝はかりきれないほどの量　斛＝石＝10斗

詩人だから万斛で素人なら一合で済むかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦労性で、凡骨の倍以上に神経が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜びもあろうが、無量の悲も多かろう。そんならば詩人になるのも考え物だ。

しばらくは路が平(タイラ)で、右は雑木山(ゾウキヤマ)、左は菜の花の見つづけである。足の下に時々蒲公英(タンポポ)を踏みつける。鋸(ノコギリ)のような葉が遠慮なく四方へのして真中に黄色な珠を擁護している。菜の花に気をとられて、踏みつけたあとで、気の毒な事をしたと、振り向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎮座している。呑気なものだ。また考えをつづける。

詩人に憂(ウレイ)はつきものかも知れないが、あの雲雀(ヒバリ)を聞く心持になれば微塵(ミジン)の苦もない。菜の花を見ても、ただうれしくて胸が躍(オド)るばかりだ。蒲公英もその通り、桜も――桜はいつか見えなくなった。こう山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥(クタビ)れて、旨いものが食べられぬくらいの事だろう。

しかし苦しみのないのはなぜだろう。ただこの景色を一幅(ブク)の画(エ)として観(ミ)、一巻の詩として読むからである。画であり詩である以上は地面を貫って、開拓する気にもならねば、鉄道をかけて一儲けする了見も起らぬ。ただこの景色が――腹の足しにもならぬ、月給の補いにもならぬこの景色が景色としてのみ、余が心を楽ませつつあるから苦労も心配も伴わぬのだろう。自然の力はここにおいて尊とい。吾人(ゴジン)の性情を瞬刻に陶冶(トウヤ)して醇乎(ジュンコ)として醇(ジュン)なる詩境に入らしむるのは自然である。

※吾人＝われわれ　※陶冶＝育成　※醇乎＝純粋

恋はうつくしかろ、孝もうつくしかろ、忠君愛国も結構だろう。しかし自身がその局(キョク)に当れば利害の旋風(ツムジ)に捲(マ)き込まれて、うつくしき事にも、結構な事にも、目は眩(クラ)んでしまう。したがってどこに詩があるか自身には解しかねる。

これがわかるためには、わかるだけの余裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。三者の地位に立てばこそ芝居は観(ミ)て面白い。小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小説を読んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げている。見たり読んだりする間だけは詩人である。小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小説を読んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げている。見たり読んだりする間だけは詩人である。

それすら、普通の芝居や小説では人情を免(マヌ)かれぬ。苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする。見るものもいつかその中に同化して苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする。取柄(トリエ)は利慾が交らぬと云う点に存するかも知れぬが、交わらぬだけにその他の情緒は常よりは余計に活動するだろう。それが嫌だ。

苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりは人の世につきものだ。余も三十年の間

それを仕通(シトオ)して、飽々(アキアキ)した。飽き飽きした上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大変だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞するようなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。　※塵界(ジンカイ)＝俗世間

いくら傑作でも人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少かろう。

※理非＝道理にかなっていることとかなっていないこと

どこまでも世間を出る事が出来ぬのが彼らの特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるからいわゆる詩歌(シイカ)の純粋なるものもこの境を解脱する事を知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勧工場(カンコウバ)にあるものだけで用を弁じている。いくら詩的になっても地面の上を馳けてあるいて、銭の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。

　うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱(ゲダツ)したのがある。採菊東籬下(キクヲトル トウリノモト)、悠然見南山(ユウゼントシテ ナンザンヲミル)。ただそれぎりの裏に暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。※東籬＝東側の垣根

垣の向うに隣りの娘が覗いてる訳でもなければ、南山に親友が奉職している次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる。　※出世間：仏教用語＝煩悩などで汚された、この世界のすべての存在を世間というのに対し、それを超越しているものを指す。

独坐幽篁裏(ヒトリ ユウコウノウチニ ザシ)、　弾琴復長嘯(キンヲ ダンジテ マタチョウショウス)、　深林人不知(シンリン ヒトシラズ)、　明月来相照(メイゲツ キタリテ アイテラス)。

※幽篁＝奥深く静かな竹やぶ　※長嘯＝声を長くひいて詩歌を吟じること

ただ二十字のうちに優に別乾坤(ベツケンコン)を建立(コンリュウ)している。　※乾坤＝天地、世界

この乾坤の功徳は「不如帰(ホトトギス)」や「金色夜叉(コンジキヤシャ)」の功徳ではない。汽船、汽車、権利、義務、道徳、礼義で疲れ果てた後に、すべてを忘却してぐっすり寝込むような功徳である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀にこの出世間的の詩味は大切である。惜しい事に今の詩を作る人も、詩を読む人もみんな、西洋人にかぶれているから、わざわざ呑気な扁舟(ヘンシュウ)を泛(ウカ)べてこの桃源に溯(サカノボ)るものはないようだ。　※扁舟＝小舟

余は固(モト)より詩人を職業にしておらんから、王維や淵明の境界(キョウガイ)を今の世に布教して広げようと云う心掛も何もない。　※王維＝唐の時代の自然詩人　※淵明＝東晋時代の詩人

ただ自分にはこう云う感興が演芸会よりも舞踏会よりも薬になるように思われる。ファウストよりも、ハムレットよりもありがたく考えられる。こうやって、ただ一人絵の具箱と三脚几(キ)を担(カツ)いで春の山路をのそのそあるくのも全くこれがためである。淵明、王維の詩境を直接に自然から吸収して、すこしの間でも非人情の天地に逍遥(ショウヨウ)したいからの願(ネガイ)。一つの酔興だ。　※逍遥＝気ままにあちこち歩き回ること

もちろん人間の一分子(イチブンシ)だから、いくら好きでも、非人情はそう長く続く訳には行かぬ。淵明だって年が年中南山(ナンザン)を見詰めていたのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳を釣らずに寝た男でもなかろう。やはり余った菊は花屋へ売りこかして、生えた筍は八百屋へ払い下げたものと思う。こう云う余もその通り。いくら雲雀と菜の花が気に入ったって、山のなかへ野宿するほど非人情が募ってはおらん。こんな所でも人間に逢う。じんじん端折(バショ)りの頬冠(ホオカム)りや、赤い腰巻の姉さんや、時には人間より顔の長い馬にまで逢う。　※じんじん端折(バショ)り＝爺端折り＝着物の裾を背中の帯に挟み込むこと

百万本の檜(ヒノキ)に取り囲まれて、海面を抜く何百尺かの空気を呑んだり吐いたりしても、人の臭いはなかなか取れない。それどころか、山を越えて落ちつく先の、今宵の宿は那古井の温泉場だ。

ただ、物は見様(ミヨウ)でどうでもなる。レオナルド・ダ・ヴィンチが弟子に告げた言(コトバ)に、あの鐘の音(オト)を聞け、鐘は一つだが音はどうとも聞かれるとある。一人の男、一人の女も見様次第でいかようとも見立てがつく。どうせ非人情をしに出掛けた旅だから、そのつもりで人間を見たら、浮世小路(コウジ)の何軒目に狭苦しく暮した時とは違うだろう。よし全く人情を離れる事が出来んでもせめて御能拝見(オノウハイケン)の時くらいは淡い心持ちにはなれそうなものだ。能にも人情はある。七騎落(シチキオチ)でも、墨田川でも泣かぬとは保証が出来ん。しかしあれは情三分芸七分で見せるわざだ。　※七騎落、墨田川＝能の演目

我らが能から享(ウ)けるありがた味は下界の人情をよくそのままに写す手際から出てくるのではない。そのままの上へ芸術という着物を何枚も着せて、世の中にあるまじき悠長な振舞をするからである。

しばらくこの旅中に起る出来事と、旅中に出逢う人間を能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだろう。まるで人情を棄てる訳には行くまいが、根が詩的に出来た旅だから、非人情のやりついでに、なるべく節倹してそこまでは漕ぎつけたいものだ。南山や幽篁(ユウコウ)とは性(タチ)の違ったものに相違ないし、また雲雀や菜の花といっしょにする事も出来まいが、なるべくこれに近づけて、近づけ得る限りは同じ観察点から人間を視てみたい。芭蕉と云う男は枕元へ馬が尿(イバリ)するのをさえ雅(ガ)な事と見立てて発句にした。余もこれから逢う人物を――百姓も、町人も、村役場の書記も、爺さんも婆さんも――ことごとく大自然の点景として描き出されたものと仮定して取こなして見よう。もっとも画中の人物と違って、彼らはおのがじし勝手な真似をするだろう。しかし普通の小説家のようにその勝手な真似の根本を探ぐって、心理作用に立ち入ったり、人事葛藤の詮議立てをし

ては俗になる。動いても構わない。画中の人間が動くと見れば差し支ない。画中の人物はどう動いても平面以外に出られるものではない。平面以外に飛び出して、立方的に働くと思えばこそ、こっちと衝突したり、利害の交渉が起ったりして面倒になる。面倒になればなるほど美的に見ている訳に行かなくなる。これから逢う人間には超然と遠き上から見物する気で、人情の電気がむやみに双方で起らないようにする。そうすれば相手がいくら働いても、こちらの懐には容易に飛び込めない訳だから、つまりは画の前へ立って、画中の人物が画面の中(ウチ)をあちらこちらと騒ぎ廻るのを見るのと同じ訳になる。間三尺も隔てていれば落ちついて見られる。あぶな気なしに見られる。言を換えて云えば、利害に気を奪われないから、全力を挙げて彼らの動作を芸術の方面から観察する事が出来る。余念もなく美か美でないかと鑒識(カンシキ)する事が出来る。　※鑒識＝鑑識

ここまで決心をした時、空があやしくなって来た。煮え切れない雲が、頭の上へ靠垂(モタ)れ懸(カカ)っていたと思ったが、いつのまにか、崩れ出して、四方はただ雲の海かと怪しまれる中から、しとしとと春の雨が降り出した。菜の花は疾くに通り過して、今は山と山の間を行くのだが、雨の糸が濃(コマヤカ)かでほとんど霧を欺くくらいだから、隔たりはどれほどかわからぬ。時々風が来て、高い雲を吹き払うとき、薄黒い山の背が右手に見える事がある。何でも谷一つ隔てて向うが脈の走っている所らしい。左はすぐ山の裾と見える。深く罩(コ)める雨の奥から松らしいものが、ちょくちょく顔を出す。出すかと思うと、隠れる。雨が動くのか、木が動くのか、夢が動くのか、何となく不思議な心持ちだ。

路は存外広くなって、かつ平(タイラ)だから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂(アマダ)れがぽたりぽたりと落つる頃、五六間先きから、鈴の音がして、

黒い中から、馬子がふうとあらわれた。

「ここらに休む所はないかね」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ。だいぶ濡(ヌ)れたね」　※十五丁＝約1.6km

まだ十五丁かと、振り向いているうちに、馬子の姿は影画(カゲエ)のように雨につつまれて、またふうと消えた。糠(ヌカ)のように見えた粒は次第に太く長くなって、今は一筋(ヒトスジ)ごとに風に捲(マ)かれる様までが目に入(イ)る。羽織はとくに濡れ尽して肌着に浸(シ)み込んだ水が、身体の温度で生暖く感ぜられる。気持がわるいから、帽を傾けて、すたすた歩行(アル)く。

茫々(ボウボウ)たる薄墨色(ウスズミイロ)の世界を、幾条(イクジョウ)の銀箭(ギンセン)が斜めに走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思えば、詩にもなる、句にも咏まれる。　※銀箭＝銀色の矢

有体(アリテイ)なる己れを忘れ尽して純客観に眼をつくる時、始めてわれは画中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。　※有体なる己れ＝あるがままの自分

ただ降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを気に掛ける瞬間に、われはすでに詩中の人にもあらず、画裡(ガリ)の人にもあらず。依然として市井(シセイ)の一豎子(ジュシ)に過ぎぬ。※豎子＝青二才

雲煙飛動の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情けも心に浮ばぬ。蕭々(ショウショウ)として独り春山を行く吾の、いかに美しきかはなおさらに解せぬ。　※蕭々＝物寂しい風雨の音

初めは帽を傾けて歩行(アルイ)た。後にはただ足の甲のみを見詰めてあるいた。終りには肩をすぼめて、恐る恐る歩行た。雨は満目の樹梢を揺(ウゴ)かして四方より孤客(コカク)に逼(セマ)る。非人情がちと強過ぎたようだ。

二

「おい」と声を掛けたが返事がない。

軒下(ノキシタ)から奥を覗(ノゾ)くと煤(スス)けた障子(ショウジ)が立て切ってある。向う側は見えない。五六足の草鞋(ワラジ)が淋(サビ)しそうに庇(ヒサシ)から吊(ツル)されて、屈托気にふらりふらりと揺れる。下に駄菓子の箱が三つばかり並んで、そばに五厘銭と文久銭が散らばっている。

「おい」とまた声をかける。土間の隅に片寄せてある臼の上に、ふくれていた鶏(ニワトリ)が、驚ろいて眼をさます。ククク、クククと騒ぎ出す。敷居の外に土竈(ドベッツイ)が、今しがたの雨に濡れて、半分ほど色が変ってる上に、真黒な茶釜(チャガマ)がかけてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜かわからない。幸い下は焚きつけてある。　※土竈＝土のカマド

返事がないから、無断でずっと這入(ハイ)って、床几(ショウギ)の上へ腰を卸(オロ)した。鶏は羽搏(ハバタ)きをして臼(ウス)から飛び下りる。今度は畳の上へあがった。障子がしめてなければ奥まで馳けぬける気かも知れない。雄が太い声でこけっこっこと云うと、雌が細い声でけけっこっこと云う。まるで余を狐か狗(イヌ)のように考えているらしい。床几の上には一升枡ほどな煙草盆が閑静に控えて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、すこぶる悠長に燻(イブ)っている。雨はしだいに収まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤(スス)けた障子がさらりと開(ア)く。なかから一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだろうとは思っていた。竈(ヘツイ)に火は燃えている。菓子箱の上に銭が散らばっている。線香は呑気(ノンキ)に燻っている。どうせ出るにはきまっている。しかし自分の

見世(ミセ)を明け放しても苦にならないと見えるところが、少し都とは違っている。返事がないのに床几に腰をかけて、いつまでも待ってるのも少し二十世紀とは受け取れない。ここらが非人情で面白い。その上出て来た婆さんの顔が気に入った。

二三年前宝生(ホウショウ)の舞台で高砂(タカサゴ)を見た事がある。その時これはうつくしい活人画(カツジンガ)だと思った。　※宝生＝当時、神田猿楽町にあった東京随一の能楽堂

箒(ホウキ)を担(カツ)いだ爺さんが橋懸(ハシガカ)りを五六歩来て、そろりと後向になって、婆さんと向い合う。その向い合うた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔がほとんど真むきに見えたから、ああうつくしいと思った時に、その表情はぴしゃりと心のカメラへ焼き付いてしまった。茶店の婆さんの顔はこの写真に血を通わしたほど似ている。

「御婆さん、ここをちょっと借りたよ」

「はい、これは、いっこう存じませんで」

「だいぶ降ったね」

「あいにくな御天気で、さぞ御困りで御座んしょ。おおおおだいぶお濡(ヌ)れなさった。今火を焚(タ)いて乾かして上げましょ」

「そこをもう少し燃(モ)しつけてくれれば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなった」

「へえ、ただいま焚いて上げます。まあ御茶を一つ」

と立ち上がりながら、しっしっと二声(フタコエ)で鶏(ニワトリ)を追い下げる。こここと馳(カ)け出した夫婦は、焦茶色(コゲチャイロ)の畳から、駄菓子箱の中を踏みつけて、往来へ飛び出す。雄の方が逃げるとき駄菓子の上へ糞(フン)を垂れた。

「まあ一つ」と婆さんはいつの間(マ)にか刳(ク)り抜き盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げている底に、一筆がきの梅の花が三輪無雑作に焼き付けられている。

「御菓子を」と今度は鶏の踏みつけた胡麻(ゴマ)ねじと微塵棒(ミジンボウ)を持ってくる。

※微塵棒＝微塵粉に砂糖を加えて煮固め，細長く棒状にねじった駄菓子

糞はどこぞに着いておらぬかと眺めて見たが、それは箱のなかに取り残されていた。

婆さんは袖無(ソデナ)しの上から、襷(タスキ)をかけて、竈(ヘッツイ)の前へうずくまる。余は懐(フトコロ)から写生帖を取り出して、婆さんの横顔を写しながら、話しをしかける。

「閑静でいいね」

「へえ、御覧の通りの山里(ヤマザト)で」

「鶯(ウグイス)は鳴くかね」

「ええ毎日のように鳴きます。此辺(ココラ)は夏も鳴きます」

「聞きたいな。ちっとも聞えないとなお聞きたい」

「あいにく今日(キョウ)は――先刻(サッキ)の雨でどこぞへ逃げました」

折りから、竈(ヘッツイ)のうちが、ぱちぱちと鳴って、赤い火が颯(サッ)と風を起して一尺あまり吹き出す。

「さあ、御(オ)あたり。さぞ御寒かろ」と云う。軒端(ノキバ)を見ると青い煙りが、突き当って崩(クズ)れながらに、微(カス)かな痕(アト)をまだ板庇(イタビサシ)にからんでいる。

「ああ、好(イ)い心持ちだ、御蔭(オカゲ)で生き返った」

「いい具合に雨も晴れました。そら天狗巌(テングイワ)が見え出しました」

逡巡(シュンジュン)として曇り勝ちなる春の空を、もどかしとばかりに吹き払う山嵐の、思い切り

よく通り抜けた前山(ゼンザン)の一角(イッカク)は、未練もなく晴れ尽して、老嫗(ロウウ)の指さす方に巑岏(サンガン)と、あら削りの柱のごとく聳えるのが天狗岩だそうだ。　※巑岏＝山が鋭く聳え立つさま

余はまず天狗巌を眺めて、次に婆さんを眺めて、三度目には半々に両方を見比べた。画家として余が頭のなかに存在する婆さんの顔は高砂の媼(タカサゴ　ババ)と、蘆雪(ロセツ)のかいた山姥(ヤマウバ)のみである。蘆雪の図を見たとき、理想の婆さんは物凄(モノスゴ)いものだと感じた。紅葉(モミジ)のなかか、寒い月の下に置くべきものと考えた。宝生(ホウショウ)の別会能(ベツカイノウ)を観るに及んで、なるほど老女にもこんな優しい表情があり得るものかと驚ろいた。

※別会能＝月ごとの定例と区別し、より華やかな演能会のこと

あの面(メン)は定めて名人の刻んだものだろう。惜しい事に作者の名は聞き落したが、老人もこうあらわせば、豊かに、穏(オダ)やかに、あたたかに見える。金屏にも、春風にも、あるは桜にもあしらって差し支ない道具である。余は天狗岩よりは、腰をのして、手を翳(カザ)して、遠く向うを指している、袖無し姿の婆さんを、春の山路の景物として恰好なものだと考えた。余が写生帖を取り上げて、今しばらくという途端に、婆さんの姿勢は崩れた。

手持無沙汰に写生帖を、火にあてて乾(カワ)かしながら、

「御婆さん、丈夫そうだね」と訊(タズ)ねた。

「はい。ありがたい事に達者で――針も持ちます、苧(オ)もうみます、御団子の粉(コ)も磨(ヒ)きます」　※苧＝カラムシ　繊維用に有史以前から栽培されてきた植物　現在は野生化

この御婆さんに石臼を挽(ヒ)かして見たくなった。しかしそんな注文も出来ぬから、

「ここから那古井(ナコイ)までは一里足らずだったね」と別な事を聞いて見る。

「はい、二十八丁と申します。旦那(ダンナ)は湯治(トウジ)に御越(オコ)しで……」　※28丁＝約3km

「込み合わなければ、少し逗留(トウリュウ)しようかと思うが、まあ気が向けばさ」

「いえ、戦争が始まりましてから、頓(トン)と参るものは御座いません。まるで締め切り同様で御座います」

「妙な事だね。それじゃ泊(ト)めてくれないかも知れんね」

「いえ、御頼みになればいつでも宿めます」

「宿屋はたった一軒だったね」

「へえ、志保田(シホダ)さんと御聞きになればすぐわかります。村のものもちで、湯治場だか、隠居所だかわかりません」

「じゃ御客がなくても平気な訳だ」

「旦那は始めてで」

「いや、久しい以前ちょっと行った事がある」

会話はちょっと途切(トギ)れる。帳面をあけて先刻(サッキ)の鶏を静かに写生していると、落ちついた耳の底へじゃらんじゃらんと云う馬の鈴が聴(キコ)え出した。この声がおのずと、拍子をとって頭の中に一種の調子が出来る。眠りながら、夢に隣りの臼の音に誘われるような心持ちである。余は鶏の写生をやめて、同じページの端(ハジ)に、

春風や惟然(イネン)が耳に馬の鈴　※惟然＝松尾芭蕉の弟子　広瀬惟然(イゼン)　芭蕉の死後、芭蕉の句を念仏のように唱えて、日本中を巡り歩いた。 馬の耳に念仏を掛けている。

と書いて見た。山を登ってから、馬には五六匹逢った。逢った五六匹は皆腹掛をかけて、鈴を鳴らしている。今の世の馬とは思われない。

やがて長閑(ノドカ)な馬子唄(マゴウタ)が、春に更(フ)けた空山一路(クウザンイチロ)の夢を破る。憐れの底に気楽な響がこも

って、どう考えても画(エ)にかいた声だ。

馬子唄(マゴウタ)の鈴鹿越(スズカ)ゆるや春の雨

と、今度は斜(ハス)に書きつけたが、書いて見て、これは自分の句でないと気がついた。

「また誰ぞ来ました」と婆さんが半(ナカ)ば独(ヒト)り言(ゴト)のように云う。

ただ一条(ヒトスジ)の春の路だから、行くも帰るも皆近づきと見える。最前逢(オ)うた五六匹のじゃらんじゃらんもことごとくこの婆さんの腹の中で、また誰ぞ来たと思われては山を下り、思われては山を登ったのだろう。路寂寞(ロジャクマク)と古今の春を貫いて、花を厭(イト)えば足を着くるに地なき小村に、婆さんは幾年の昔からじゃらん、じゃらんを数え尽くして、今日の白頭に至ったのだろう。　※寂寞＝静かでひっそりとしているさま

馬子唄(マゴウタ)や白髪(シラガ)も染めで暮るる春

と次のページへ認(シタ)めたが、これでは自分の感じを云い終(オオ)せない、もう少し工夫のありそうなものだと、鉛筆の先を見詰めながら考えた。何でも白髪という字を入れて、幾代の節と云う句を入れて、馬子唄という題も入れて、春の季も加えて、それを十七字に纏めたいと工夫しているうちに、

「はい、今日は」と実物の馬子が店先に留(トマ)って大きな声をかける。

「おや源さんか。また城下へ行くかい」

「何か買物があるなら頼まれて上げよ」

「そうさ、鍛冶町(カジチョウ)を通ったら、娘に霊厳寺(レイガンジ)の御札(オフダ)を一枚もらってきておくれなさい」

「はい、貰ってきよ。一枚か。――御秋(オアキ)さんは善(ヨ)い所へ片づいて仕合せだ。な、御叔母(オバ)さん」

「ありがたい事に今日(コンニチ)には困りません。まあ仕合せと云うのだろか」

「仕合せとも、御前。あの那古井(ナコイ)の嬢さまと比べて御覧」

「本当に御気の毒な。あんな器量を持って。近頃はちっとは具合がいいかい」

「なあに、相変らずさ」

「困るなあ」と婆さんが大きな息をつく。

「困るよう」と源さんが馬の鼻を撫(ナ)でる。枝繁(エダシゲ)き山桜の葉も花も、深い空から落ちたままなる雨の塊(カタ)まりを、しっぽりと宿していたが、この時わたる風に足をすくわれて、いたたまれずに、仮りの住居を、さらさらと転げ落ちる。馬は驚ろいて、長い鬣(タテガミ)を上下(ウエシタ)に振る。

「コーラッ」と叱(シカ)りつける源さんの声が、じゃらん、じゃらんと共に余の冥想(メイソウ)を破る。

　御婆さんが云う。「源さん、わたしゃ、お嫁入りのときの姿が、まだ眼前(メサキ)に散らついている。裾模様(スソモヨウ)の振袖(フリソデ)に、高島田で、馬に乗って……」

「そうさ、船ではなかった。馬であった。やはりここで休んで行ったな、御叔母(オバ)さん」

「あい、その桜の下で嬢様の馬がとまったとき、桜の花がほろほろと落ちて、せっかくの島田に斑(フ)が出来ました」

　余はまた写生帖をあける。この景色は画(エ)にもなる、詩にもなる。心のうちに花嫁の姿を浮べて、当時の様を想像して見てしたり顔に、

　　花の頃を越えてかしこし馬に嫁

と書きつける。不思議な事には衣装も髪も馬も桜もはっきりと目に映じたが、花嫁の顔だけは、どうしても思いつけなかった。しばらくあの顔か、この顔か、と思案している

うちに、ミレーのかいた、オフェリヤの面影が忽然と出て来て、高島田の下へすぽりとはまった。これは駄目だと、せっかくの図面を早速取り崩す。

※オフェーリア＝シェイクスピアの『ハムレット』のヒロインを題材にした絵画。 巻末参照。

衣装も髪も馬も桜も一瞬間に心の道具立から奇麗に立ち退いたが、オフェリヤの合掌して水の上を流れて行く姿だけは、朦朧(モウロウ)と胸の底に残って、棕梠箒(シュロボウキ)で煙を払うように、さっぱりしなかった。空に尾を曳く彗星の何となく妙な気になる。

「それじゃ、まあ御免」と源さんが挨拶(アイサツ)する。

「帰りにまた御寄(オヨ)り。あいにくの降りで七曲りは難義だろ」

「はい、少し骨が折れよ」と源さんは歩行(アルキ)出す。源さんの馬も歩行出す。じゃらんじゃらん。

「あれは那古井の男かい」

「はい、那古井の源兵衛で御座んす」

「あの男がどこぞの嫁さんを馬へ乗せて、峠を越したのかい」

「志保田の嬢様が城下へ御輿入(オコシイレ)のときに、嬢様を青馬(アオ)に乗せて、源兵衛が羈絏(ハヅナ)を牽(ヒ)いて通りました。――月日の立つのは早いもので、もう今年で五年になります」

鏡に対(ムカ)うときのみ、わが頭の白きを喞(カコ)つものは幸の部に属する人である。※喞つ＝嘆く指を折って始めて、五年の流光に、転輪の疾(ト)き趣(オモムキ)を解し得たる婆さんは人間としてはむしろ仙に近づける方だろう。余はこう答えた。

「さぞ美くしかったろう。見にくればよかった」

「ハハハ今でも御覧になれます。湯治場(トウジバ)へ御越しなされば、きっと出て御挨拶をなされ

ましょう」

「はあ、今では里にいるのかい。やはり裾模様の振袖を着て、高島田に結(イ)っていればいいが」

「たのんで御覧なされ。着て見せましょ」

　余はまさかと思ったが、婆さんの様子は存外真面目である。非人情の旅にはこんなのが出なくては面白くない。婆さんが云う。

「嬢様と長良(ナガラ)の乙女とはよく似ております」

「顔がかい」

「いいえ。身の成り行きがで御座んす」

「へえ、その長良の乙女と云うのは何者かい」

「昔しこの村に長良の乙女と云う、美くしい長者の娘が御座りましたそうな」

「へえ」

「ところがその娘に二人の男が一度に懸想(ケソウ)して、あなた」　※懸想＝恋慕うこと

「なるほど」

「ささだ男に靡(ナビ)こうか、ささべ男に靡こうかと、娘はあけくれ思い煩(ワズラ)ったが、どちらへも靡きかねて、とうとう

　　あきづけばをばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも

　※　秋めいてくると尾花の上に露がつきます。その露のように今にも消え果ててしまいそうに私はあなたのことが、この上もなく切なく思われます。

と云う歌を咏(ヨ)んで、淵川(フチカワ)へ身を投げて果(ハ)てました」

余はこんな山里へ来て、こんな婆さんから、こんな古雅(コガ)な言葉で、こんな古雅な話をきこうとは思いがけなかった。

「これから五丁東へ下(クダ)ると、道端(ミチバタ)に五輪塔(ゴリンノトウ)が御座んす。ついでに長良(ナガラ)の乙女の墓を見て御行きなされ」　※五丁＝545m

余は心のうちに是非見て行こうと決心した。婆さんは、そのあとを語りつづける。

「那古井の嬢様にも二人の男が祟(タタ)りました。一人は嬢様が京都へ修行に出て御出(オイ)での頃御逢(オア)いなさったので、一人はここの城下で随一の物持ちで御座んす」

「はあ、御嬢さんはどっちへ靡いたかい」

「御自身は是非京都の方へと御望みなさったのを、そこには色々な理由(ワケ)もありましたろが、親ご様が無理にこちらへ取りきめて……」

「めでたく、淵川(フチカワ)へ身を投げんでも済んだ訳だね」

「ところが――先方(サキ)でも器量望みで御貰(オモラ)いなさったのだから、随分大事にはなさったかも知れませぬが、もともと強(シ)いられて御出なさったのだから、どうも折合がわるくて、御親類でもだいぶ御心配の様子で御座んした。ところへ今度の戦争で、旦那様の勤めて御出の銀行がつぶれました。それから嬢様はまた那古井の方へ御帰りになります。世間では嬢様の事を不人情だとか、薄情だとか色々申します。もとは極々(ゴクゴク)内気の優しいかたが、この頃ではだいぶ気が荒くなって、何だか心配だと源兵衛が来るたびに申します。……」

これからさきを聞くと、せっかくの趣向が壊れる。ようやく仙人になりかけたところを、誰か来て羽衣(ハゴロモ)を帰せ帰せと催促するような気がする。七曲りの険を冒して、やっと

の思で、ここまで来たものを、そうむやみに俗界に引きずり下されては、飄然(ヒョウゼン)と家を出た甲斐がない。世間話しもある程度以上に立ち入ると、浮世の臭いが毛孔から染込んで、垢で身体が重くなる。　※飄然(ヒョウゼン) と＝気ままに、ふらりと

「御婆さん、那古井へは一筋道だね」と十銭銀貨を一枚床几(ショウギ)の上へかちりと投げ出して立ち上がる。

「長良(ナガラ)の五輪塔から右へ御下(オクダ)りなさると、六丁ほどの近道になります。路(ミチ)はわるいが、御若い方にはその方がよろしかろ。――これは多分に御茶代を――気をつけて御越しなされ」